

## 前回フォーラムでのご意見と機構の対応

## 核不拡散科学技術開発の今後の取組

ご意見	機構の対応
<p>(中期計画の実績と次期中期計画)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人材育成について、第1期中期計画期間の実績概要で、主に大学関係、それから国際展開としてはアジア地区への協力がある。国内には JAEA と原子力安全基盤機構 (JNES)、その他の財団法人がある。所管官庁はそれぞれ違うが、その中間に位置するもの同士の連携が非常に重要。 保障措置については、核物質管理センター (NMCC) と JAEA が連携をとり進めている。また、核セキュリティの分野でも、原子力安全基盤機構 (JNES) と協力している。 そこが中期計画の実績に表れると良い。同じレベルでは連携して、いま非常にいい関係なので、今後とも連携をもっと強力に進めるべきということを書いてほしい。</li> <li>・ 技術的知見・経験をベースとした国際貢献に、解体核の処分の話と包括的核実験禁止条約 (CTBT) に加え、洞爺湖サミットで取り上げられた 3S の基盤整備のための協力をアジアから求められてきていることから、それを一つの重要な事項として挙げた方が良い。それから、アメリカが行っている Next Generation Safeguards Initiative (NGSI: 次世代保障措置構想) についても盛り込んだ方が良い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 原子力機構の核不拡散対応の理念に「エネルギーセキュリティと地球環境の保護を目指し、これまで培ってきた原子力研究開発の豊富な知識と経験に立脚し技術力を結集するとともに、内外の関係機関と十分に連携し平和利用と核不拡散の両立のために貢献を果たす」とうたっているとおり、関係機関との連携は重要と考えている。</li> <li>・ 次期中期計画案には、具体的に原子力分野の人材育成にあたり「国内外の関係機関との連携協力を強化するとともに、原子力人材育成情報の収集、分析、発信等を行うことにより、人材育成ネットワークを構築する」と記載をしている。</li> <li>・ 人材育成分野に限らず、核不拡散政策研究や技術開発においても連携を進めてまいりたい。</li> <li>・ 次期中期計画案では、CTBT に係る検証技術開発やロシアの核兵器解体に伴う余剰 Pu の処分支援について記載していることに加えて、「関係行政機関の要請に基づき、アジア等の原子力新興国を対象に、セミナーやトレーニング等の実施により核不拡散・核セキュリティにかかる法整備や体制整備を支援する。」を新たに記載し、今後も、アジア諸国に対し、3S の基盤整備のための協力を行っていくこととしている。</li> <li>・ 2009 年 11 月のオバマ大統領と鳩山総理の首脳会談で採択された「核兵器のない世界」に向けた日米共同ステートメント受け、「核物質の測定・検知技術開発等を行う」旨を新た</li> </ul>

ご意見	機構の対応
	<p>に記載している。その技術開発においては、米国の NGSII と連携して進めていく。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ イランのような国を、核燃料サイクルの自由という枠組みを保持したままに取り込むことになると、新しい拡散抵抗性の高い技術の開発を行っておく必要がある。今まで JAEA が行ったのは、いわば評価技術のブラッシュアップであったが、サイクル技術そのもののブラッシュアップというところまでも進めることを検討してほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 原子力システムの核不拡散性を高める手段として、設計段階から保障措置の適用検討を行い、効率化を図る「Safeguard by Design」について、IAEA が中心となって進めているガイドライン作成に JAEA も参加して協力をしており、また、核物質防護についても同様の概念に基づき、日米原子力共同行動計画 (JNEAP) の中で共同で「Security by Design Handbook」の作成を行ない国際的な核不拡散・核セキュリティ強化に向けた取組を行なっている。</li> <li>・ 核拡散抵抗性技術のガイドラインの策定に向けた国際的なコンセンサス作りが必要と考えており、これに向けた国際的な議論を行っている。</li> <li>・ JAEA の次世代原子力システム研究開発部門を中心に実施している FBR サイクル実用化研究開発 (FaCT) プロジェクトの中では、核拡散抵抗性の高いサイクル技術の要素検討及び試験を進めているところである。具体的には抵抗性を高めるサイクル技術として、U、Pu、Np の一括回収プロセスや低除染プロセスの検討、コスト評価などを実施している。</li> </ul>

## 国際フォーラム企画案について

ご意見	機構の対応
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 討論のメンバーリストでは、たとえば6月の核燃料バンクの議論で否定的な議論をした国、それからインドとの原子力協力について、いわばダブルスタンダードではないかと非難をしている国、そういう国が入っていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ご意見をいただき、今回の国際フォーラムには、初めてブラジル(ABACC)からの参加者を得て開催することができた。核兵器国の核軍縮が進まない中で、非核兵器国が追加議定書など、さらなるオブリゲーションを与えられることに強く反対する意見を述べていた。</li> <li>・ インドについては、参加者を得る努力をしたが、最終的に参加に至らなかった。</li> </ul>

## CTBTシンポジウムの結果

ご意見	機構の対応
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ニュートリノ装置、スーパーカミオカンデのような装置を使えるのではないかというご提言があった。そこで、J-PARC センターを通じて、高エネ研にこの点について確認する。(当方のご提案)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東北大学ニュートリノセンター長の井上邦雄教授より、カムランド(神岡液体シンチレータ反ニュートリノ検出器)では、北朝鮮の核爆発時刻付近でのニュートリノ反応の観測は無く、技術的に核爆発のニュートリノ観測は難しいとのことをご回答を頂いた。</li> </ul>